

## 大人の発達障害

東京慈恵会医科大学客員教授

牛島 定信

(聞き手 池脇克則)

---

大人の発達障害についてご教示ください。

<埼玉県勤務医>

**池脇** 発達障害、特に「大人の」というのがついているのですけれども、おそらく発達障害というのは、学童期ぐらいからの発達障害もあれば、このように大人になって顕在化してくる発達障害もあるような印象を受けています。まず最初に発達障害とはどのようなものなのか、簡単などころから教えてください。

**牛島** 一般に発達障害というときには、いわゆる自閉症が基盤にある。そして、注意欠陥多動性障害（ADHD）が混じっている。そういうケースをいうことが多いです。したがって、これは子どものときから起こっている病気ですけれども、大人の発達障害というときは、子どものころはその程度が軽くて、本人はもちろんのこと、周囲もそれとは気づかないまま大人になって、そこである課題にぶつかって破綻をき

たした。そこで精神科を受診する、問題が表面に出てくるというかたちのものが多くあります。

**池脇** 子どものころも人とのつながり、コミュニケーションが学校であるわけですが、大人で出てくるというのは、社会人として会社で働き始めて、おかしいと感じるのが大きいのでしょうか。

**牛島** よくよく見ますと、子どものころから人とのコミュニケーションの作り方とか関係のつくり方に少し特徴があります。非常に特徴があるがゆえに、かえってそれがものすごい才能として世に認められるぐらいのものになっている人も決して少なくありません。ノーベル賞受賞者でも少なくありませんし、スポーツ選手、芸能人の中にもそういう発達障害を持った人はいると我々は見えています。しかしながら、

問題になってくるのは適応を失敗した人たちということになります。

**池脇** そうすると、先ほど先生が自閉症、ADHD、大きく2つ言われましたけれども、主に大人で出てくる発達障害は、やや疾患構成が違ってくるのでしょうか。

**牛島** 最近、注目されるようになってからは、自分はADHDではないかと訴えてくる20代、30代の男女が増えました。これは一つはいろいろ宣伝されるようになったことと関係しています。

普通、何かに集中しなければいけない。例えば、期限を限られた仕事、一気にやっちゃダメねばならないとなったときに、注意集中ができないので混乱をきたし、うつになったり、引きこもったり、時には1週間ぐらい行方不明になったというケースもあります。

**池脇** 私は内科の立場であり存じ上げませんが、統合失調症というのは幻覚、幻聴があって、おそらく自分からおかしいと思って来ることはないのと対照的に、この疾患の場合は自分自身でそれを自覚できるという特徴があるのですか。

**牛島** ADHDといわれる注意欠陥多動性障害が中心のときはそれもあります。しかし、一般に企業でも学校でも、その他一般社会においても、発達障害といわれるときは、本人も周囲もそれと気づかないままに、精神医学的に問題があるというかたちで出てくること

もあります。そういう人たちは基本的に自閉症、つまりアスペルガー症候群といわれるものを持っていることが多いような気がします。

**池脇** アスペルガー症候群は有名な疾患ですが、自閉症ということなのですか。

**牛島** 自閉症というのは、幼児自閉症と違って3歳前後で出てくる症例で3つの特徴があります。コミュニケーション能力がない。お互いに情緒的な触れ合いがない。非常に特殊なことに興味を持っている。そういうものがありますけれども、その中でコミュニケーション能力、つまり言葉の発達がないケースを特にアスペルガー症候群と呼びます。

**池脇** 今までのところをまとめますと、大人の発達障害とは、いろいろな発達障害の中でもADHDと、いわゆる自閉症の中のアスペルガー症候群が主と。

**牛島** そういことです。

**池脇** 場合によっては自分自身がその病気ではないかと精神科を受診される。

**牛島** 受診するけれども、本人も家族も、時と場合によっては医師のほうも、それと気づかないまま治療していることは決して少なくありません。

**池脇** そういう方たちは、社会に出て環境への適応がうまくいかないことがきっかけで受診される。

**牛島** はい。

**池脇** 実際にそういう方が来られて、場合によってはいろいろな要素が重複しているときもあるのかもしれませんが、先生たちはどういうふうアプローチして、疾患の診断を行われているのでしょうか。

**牛島** 先ほど申し上げましたように、ありとあらゆる精神医学的問題を持っていることが多いのです。ただ、その人たちの特徴を大まかにまとめると3つぐらいあるような気がします。

一つは、大学を卒業して就職して、事がうまく運ばない。知的には非常に能力があるのだけれども、要領が悪いとか、しゃくし定規に過ぎているとか。それで注意されると反発するという感じ。やっさもっさの末に連れてこられる感じの人が一つです。

もう一つは、妙なこだわりがあって、ちょっと変わっているという気がします。例えば、一般社会で節電を訴えたとします。そうすると、片っ端から各部屋の電気を消してしまわないと気が済まない、そういう行動に出る人がいます。やっぱり「変わってる」という見方をされて連れてこられる方ももちろんいます。

一番多いのは衝動行為。どういうことかという、自傷、それから暴力、自殺行為ももちろんあります。それから、アルコール依存とかネット依存という、いわゆる依存症のような感じの

かたち。それから、少なくないのは過食症を呈してくる人がいます。

もちろん、これはパーソナリティの障害とか、ほかの病気でたくさん出てきますけれども、よくよく見ていると、非常に幼児的な振る舞いが強くて、その退行の仕方に特徴があります。空想が現実的に見えてくるのです。例えば、退行ですから、何か事が起こってしまって、お母さんのことを思い出す。そうしたら、子どものときのお母さんの姿がありありと迫ってくるとか、飛行機が落ちるのではないかと心配したら、本当に自分に向かって落ちてくるとか、そういう特異な経験がある。タイムスリップ現象といわれます。

もう一つは、奇妙なこだわりがあります。規則を守らなければいけない。先ほど言いましたこととつながりますが、けれども、時には喫煙禁止領域だといわれるところで老人がたばこを吸っていたとすると、それは殴りつけなければいけないとか、警察に連れていかなければ気が済まないとか、そういう非常に独特の行為があります。

**池脇** どういうかたちで、いわゆる症状として出るか。その疾患そのものの症状であったり、あるいは自傷行為、アルコール依存、場合によってはうつですとか、いろいろな合併症として出るという意味では本当に多彩な症状ですね。

**牛島** そうです。精神病の状態と診

断されていることもあるし、パーソナリティ障害と診断されていることもあるし、強迫神経症と診断されていることもあるのです。しかしながら、ずっと見ていくとわかってくる。ひどいときは10年ぐらいかかって初めて気づくこともあります。「ああ、やっぱりこの人は発達障害だったな」といった、さっき申し上げた特徴を持っていることが少なくありません。

**池脇** 就職が一つのきっかけで発症するとすると、企業の側としては人的な損失につながる。何とか治してほしいという要望が強いのではないかと思います。どうやって治療していくのか、どうでしょうか。

**牛島** なかなか難しいのですけれども、もちろん一気呵成にはまいりません。しかし、一般に薬をよく使います。使わねばなりません。こういうときに普通、抗不安薬や、うつには抗うつ薬を使いますが、忘れてはならないのは抗精神病薬といわれている種類、リスペリドンとかクエチアピンとかブロナンセリンとか、抗精神病薬を使わ

ざるを得ないし、使ったほうがいいことが多いのです。

**池脇** 確認ですけれども、抗精神病薬というのは、例えばADHD、あるいはアスペルガーそのものに効果をきたすのではなくて、それによる合併症に対してですか。

**牛島** そうです。もちろん、アスペルガーに効く薬はありません。ただ、ADHDには特効薬が今2つ出てきています。一つはメチルフェニデートといって、覚醒剤の一つなのですが、しばらくはリタリンとして使われていたものです。これが社会的問題を起こしまして、使用中止となり、現在、徐放剤のコンサータ錠というものが出ました。もう一つはアトモキセチンといって、これも覚醒剤の範疇のものですが、出てきました。第3の薬として、現在、アンフェタミンが登場の準備がなされていると聞きます。

**池脇** ADHDに対しては効果が期待できる薬が使えるということですね。

**牛島** そういうことです。

**池脇** ありがとうございます。